

第4回 東京都「緑の広域計画（仮称）」策定に向けた有識者検討委員会

議事録

1. 日 時 令和8年8月4日（火）13：00～15：00

2. 場 所 都庁内会議室

3. 議 事

1) 「緑の広域計画（仮称）」の取組方針など

2) 満足感調査

4. 有識者からの意見

1) 「緑の広域計画（仮称）」の取組方針など

①全体

- ・「遊び」、「子どもの育ち」という視点、文言が少ない。子どもたちの外遊びのニーズの高さを中間のまとめの巻末資料 p.23 で示していることも踏まえ、施策の方向性の中で取り扱うことを検討いただきたい。
- ・広域的な観点から優先度の高い場所を明確に示すことが重要である。本計画にて優先順位を示すことで、事業の判断基準になるのではないかな。
- ・区市町村が本計画を参照するという視点は重要である。都が区市町村も活用できるデータを収集するとよい。都として基盤となるようなデータ等を整備することや、都として広域的な視点で重要と考える場所を示し、その維持・創出をサポートするという姿勢を示すことが望ましい。

②取組方針（基本事項）

- ・ p.8 の図は今後 10 年間で区市町村が参照することになる、広域計画として重要な図となるため、強弱をつけるなど表現を工夫し、より分かりやすく示していただきたい。
- ・ p.8 の図は 4 区分の地域別に図が作成されることも考えられる。
- ・ 日本橋川周辺での首都高速道路の地下化に伴い水辺空間やにぎわい創出の取組が行われ、注目されている。このような都心部の中にある骨格構造も示してはどうか。

③取組方針（取組の方向性）

- ・「まちづくり」という言葉は緑の創出や区画整理など多くの事柄を含むため、その表現については検討していただきたい。
- ・ p.9 の「まちづくり」と「緑の成り立ち」を説明する文章の内容がほぼ同じで、どのような違いがあるのかが分からないため、両者の違いがわかるような表現を検討していただきたい。

④取組方針（取組の方向性）（緑の成り立ち）

- ・ ネイチャーポジティブという文言は、単に生物多様性に配慮することを示す言葉ではなく、現在のネガティブな状態からポジティブに反転させていくことを指しているため、言葉の定義や使い方については十分整理した上で用いることが望ましい。
- ・ 在来種の活用は重要かつ前向きでよいと思うが、現在進行形で起きている外来種の影響は小さくないため、別途記載を検討いただきたい。
- ・ p.11 に「大名庭園」と表現されているが、大名庭園だけでなく東京には歴史的・文化的価値の高い近代庭園も存在しているため、その観点を踏まえた表現を検討いただきたい。

⑤取組方針（取組の方向性）（まちづくり）

- ・ あらゆる場所で緑を感じられることは重要で、特に住環境の緑が重要視されている。道路や公園だけでなく、民地側にどのように緑を配置し、管理していくかのほか、民有地の緑地創出支援等についても検討いただきたい。
- ・ p.11 の「あらゆる場所」において、沿岸部の海上公園等海辺の緑の観点が抜けいているように見える。沿岸部の緑も東京の魅力であり、機能的な記載だけでなく、まちの水辺としての魅力なども考慮することが望ましい。
- ・ p.12 の「東京らしい名所」に都心の水路空間についても対象の一つとして位置付けられると良い。
- ・ 観光資源に関して文言が追加されており、特に異論はない。あえて付け加えるとするなら、「交流拠点」という意味合いが明示されることが望ましい。
- ・ p.12 の「緑を活かした国際都市東京の魅力向上」ではまちなかの緑の記述が多

く、国際都市の観点が薄いため、想定する緑の対象を明確にすべきである。

- ・魅力向上には、環境面だけでなく、まちの雰囲気や過ごしやすさといった「景観」の魅力も含まれる。地形や日本の風土に寄り添う緑を固有の「景観」として保全していく視点も検討いただきたい。

⑥取組方針（取組の方向性）（人の関わり）

- ・ p.13 の「1 多様なニーズに応える緑の充実」の内容から見て、「多世代の Well-being を支える緑の充実」という表記の方が適当ではないか。
- ・ p.13 の「1 多様なニーズに応える緑の充実」の(例)の2点目に「子育てや交流を支える緑空間の充実」とあるが、「子どもの育ち」と「外遊び」の文言もいれてはどうか。
- ・ p.13 に「のびのびと過ごせる緑空間の形成」と記載されているが、少し抽象的な印象があるため、「子どもの遊び場」や「スポーツができる場」としての活用など、具体的な活用方法にも踏み込むとイメージが湧きやすい。
- ・ 社会の変化の把握が十分にできているか、改めて検討していただきたい。ボランティア一つとっても、70 歳位まで働くことが普通になった現代で、ボランティアが成り立つのか、ボランティアを通して自己実現を果たす目的があることなど、現在の社会の潮流や兆しの見えている事物について整理し、施策に反映していただきたい。
- ・ p.13 の「2 多様な主体による緑の保全・管理への参画促進」について、区民や民間団体だけでなく、区市町村のことも考慮する必要がある。都として区市町村の緑地行政、執行体制を支援する視点についても、取組の方向性に位置付けられると良い。
- ・ 自発的な参加につながるような取組が理想的と考える。
- ・ p.14 にて「自然に触れ、学ぶ」とあるが、学ぶことを目的とした「学び」と自然の中で遊ぶことを通して自然に触れることとは異なる。子どもたちにとってそうした「遊びを通じて成長する」ことは重要であるため、そのための場所や機会の確保についても、計画に位置付けることを検討いただきたい。
- ・ 子どもの遊びを通じた自然体験が重要であるため、p.14 に「遊び環境」という言葉を入れていただきたい。
- ・ p.14 に記載の自然観察だけでなく自然体験という視点も加えることが望ましい。

- ・ p.14 の「子どもたちをはじめ多くの人々が～」とあるが、子どもと大人を合わせて表記するのではなく、「思春期を含む子どもたち」と「大人世代」とを分けて記載してはどうか。人間形成のベースは「遊び」であることを念頭に置いて整理していただきたい。

⑦その他

- ・ 緑の減少は、区部は開発によるものが多く、多摩部では管理の不足や相続問題などを起因とする土地の荒廃、管理放棄が多いと思われる。取組の方向性は緑の減少原因を分けてそれぞれで考えていく必要があると考える。
- ・ 本計画の推進には、東京都がリーダーシップを発揮し、各自治体の特性を尊重しつつ、区市町村境界の緑地なども含め、隣接自治体が連携して取り組めるようサポートすることが重要である。
- ・ 自然災害と人的災害の両面から、緑の維持・保全策を包括的に検討することが重要である。

2) 満足感調査

①全体

- ・ これまで実施してきたみどり率などの調査結果は、施策や方向性の分析に使えるよう、整理、把握していただきたい。また、調査を体系化し、PDCA サイクルの中に組み込んで今後の計画や施策の改善に役立てていただきたい。
- ・ 目標や方針に近づいているのか、アウトカムの評価ができる調査となっているか、改めて検討していただきたい。満足感が増加してもなぜ伸びたのかが分からないと施策に生かせないため、説明変数と目的変数をしっかり分析できるようなデータ収集をするようにしていただきたい。
- ・ 都がこれまで調査してきたみどり率と今回のアンケート調査、緑の視認性について、それぞれ役割が違うことを明確にすべき。また、三つを組み合わせで整理、分析することで有用な結果が得られると考える。
- ・ 調査データの扱いについて、大学や企業などが二次分析をして研究活動・企業活動等に活用することができるため、公開できるものについてはオープンデータにいただきたい。
- ・ 実際に住んでいる人の感じ方の変化などをアンケートにより継続的にモニタリ

ング調査を実施している事例は少ない。10年に1度ではなく、細かな単位で継続実施し、調査の実施計画も計画に組み込むことが望ましい。

- ・施策の効果検証のための評価指標として実施するのであれば、それぞれの施策に対応した調査の項目や方法があるのではないか。アンケート調査や緑視率調査に加え、他の手法の活用についても検討の余地がある。
- ・生きものの観察アプリ、街路樹の不具合を伝えるアプリなどとの連携も都民の意識を把握する手段の一つとして位置付けてはどうか。都民の参画を促すきっかけにもなる。

②アンケート調査

- ・アンケート回答者の属性は、家族構成やペットの有無など細かく取得しておく方が良いと考える。所得による自然体験の格差があるという話もあるため、そうした視点もアンケート調査に取り入れると良いと考える。
- ・人によって「東京の緑」のイメージが異なるため、勤務先などの属性データを取得し、地域ごとの分析ができるようなデータのとり方にしていきたい。
- ・様々な分析ができるため、可能であれば居住地は郵便番号まで収集できると良い。
- ・アンケート調査のサンプル数は、市区町村別に最低限度の回収数を設定できると良い。
- ・既往のアンケートで類似の項目がある場合には、同じ文言にするなど、変化を追いつき、比較ができるような設問、聞き方になっていると良いと考える。
- ・誰と公園に行くかについても調査してはどうか。
- ・緑に期待する機能について、緑の機能として整理されている資料があるため、そうした既存の資料との対応を確認し、過不足が無いようにしていきたい。
- ・設問はできるだけ簡潔な表現とすることが望ましい。
- ・アンケートで調査する内容が計画の方向性等に紐づけられると良い。
- ・「緑の量の実感」は、出身地の環境などで判断基準が異なるため、回答者が何をもって多い・少ないと判断するのかを明確にすることが望ましい。
- ・「緑に期待する機能」は、回答者が機能を認知していない可能性があるため、回答者が東京の緑として大切だと思うものを選択できる設問となるよう検討して

いただきたい。

- ・どのような活動をしている人が Well-being を実現できているかなど、目的変数としての Well-being に関する質問項目を設けると良い。Well-being の聞き方も世界的に整理されているため、日本人が回答しやすいものを選定すると施策が展開しやすくなると考える。

③緑の視認性（緑視率）

- ・地域ごとの特性が異なるため、押しなべて一律の緑視率で捉えることには疑問がある。一方で、駅周辺で定点観測を行うことは良いと考える。
- ・緑が少ないところを定点計測地点に入れ、緑が増えていく様子を見せることで、東京都＝コンクリートジャングルという認識が変わるきっかけになるのでは。
- ・調査地点は地価との関連も考察できるような地点の取り方を検討してはどうか。
- ・映り込んでしまう人等の匿名化、保存期間、二次利用のルールなどをしっかりと決めて問題にならないように配慮していただきたい。
- ・「数値が高いほど良い」という単純評価ではなく、防犯・視認性なども考慮し、空間の用途に応じた「良質な状態の維持」を測る管理指標として活用できるかもしれない。

以上